

巻頭言



人間のためのコンピュータ

河野 隆 一†



最近のデータショーやビジネスショーにはおびただしい人が集まり、また来る人の種類も老若男女をとわず多様になった。先日米国へ行った折、本屋や雑貨屋や靴屋と並んでパーソナルコンピュータ屋があり、各社の各種のコンピュータが並び色々な人がCRT画面を見ながら自由に使っていた。店員は頻りにPASCALの良さを客に説いていた。日本にもこんな種類の店が出て来ている。

半導体技術をはじめとするコンピュータ技術の急速な進歩によってコンピュータが安価になり、工場の現場部門やオフィスの事務部門における、いわゆるエンドユーザは勿論のこと、趣味や教育などを目的として家庭の中にも浸透して来た。勿論従来から、工場の制御システムや交通、航空に関するシステムや銀行などの各種オンライン事務処理システム等においてもエンドユーザの作業員が端末からコンピュータを定型的に使って来たのであるが、現在の状況は非専門家である人達が汎用的にコンピュータを直接の道具として使うようになって来たことが著しい特長である。この状況変化は決して無視出来ないものであろう。当学会員は昭和55年4月現在約14,000人でそのうちユーザ部門に属する人は3分の1程度と推定される。この割合が今後急増加するとは思われないが、それを取りまく母体は急速に大きくなりつつあるということである。

コンピュータ30年の歴史を見ると、性能、機能を挙げることは当然のことながら、コンピュータを使い易くしようという基本要件が多くの技術進歩をもたらして来たといえよう。計算機言語も、OSも仮想記憶方式も、日本語処理、音声処理、図形処理も、あるいはネットワークアーキテクチャも分散処理も、いずれも何らかの形でコンピュータを使い易くしたい。すなわち誰でも何処でも自由に容易に使いたいという願望を実現するための手段に関わっていると考えるとよいだろう。そういう意味では我々が今話題になっている

技術の次に来たるべきものを見出すために、コンピュータを使う側にたった上記の視点を更に深めることが必要であろう。ただこの場合、コンピュータを使う側といっても、企画する立場、運営する立場、直接使う立場、システムからサービスを受ける立場などを明確に認識した考察が必要である。今までの技術やシステムの考え方にはしばしば技術屋的発想をエンドユーザ指向として押しつけて来た面もあったのではないか。今後はとくにコンピュータを直接使いサービスを受ける真のエンドユーザの立場から機能を追求する努力がますます必要となろう。拡大するユーザ層とコンピュータを研究する側、製造する側との地道な対話を続けることが情報処理技術にとって常に大切なことである。学会はこの面でも積極的役割を果たさなければならぬ。

コンピュータは至るところで使われるようになったが我々はこの道具を人間のために有効に使いたいものである。古い本であるがサイバネティクスの創始者ノーバードウィーナーが1949年に出した書物“Human Use of Human Beings”ではコンピュータその他の自動機械が社会に与える影響を憂い機械を使う人間や組織が、“know-how”と同時に“know-what”を持つべきだと主張していたことが忘れられない。彼のいうように、人間の非人間化にコンピュータが使われることが政治的、意図的にされているとは決して思わないが、まったく別の面で非人間化がもたらされることになってはいないか。すなわちコンピュータパワーが何処にでも行きわたっていくために、人間がコンピュータを頼りすぎたり、コンピュータに運命を委ねる考えになったり、独創性を失ったり、肝腎のことに頭を使わず、精神的怠惰になったりする危険は至るところにあるのではないか。いつも新たに、“Human Use of Human Beings”を指針としながら、コンピュータを人間のために使いこなしたいものである。

(昭和55年6月6日)

† 本会常務理事 三菱電機(株)電子技術システム第一部